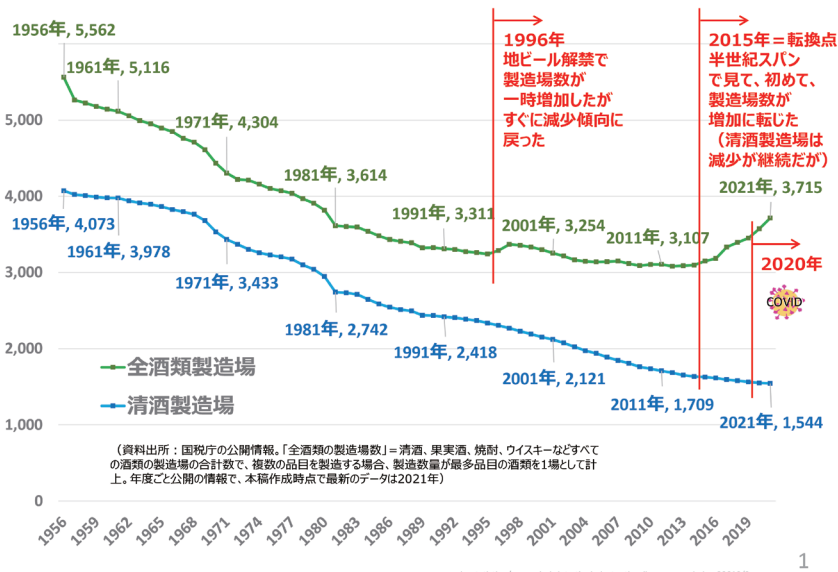


今回は、「酒造場数と酒造免許の動向分析」です。

「全酒類」と「清酒」の製造場数 1956→2021 65年の推移



●酒類製造場の数に見るパラダイムシフト

左のグラフは、国税庁が毎年公表する税務統計の「酒税総括表」に記載された「(すべての) 酒類製造場の数」(緑の折れ線)と「清酒製造場の数」(青の折れ線)。65年分をグラフ化しました。

酒類製造場の数は、終戦直後の混乱期から10年ほどは復興で増えた(グラフにはない)のですが、(グラフのはじまる)日本経済が一段落した1950年代半ばからは半世紀以上、ほぼ一貫して「減少傾向」でした。1956年の5,562から2012-14年には3,100以下にまで減りました。ところが2015年から「明確に増加」し始め、2021年は3,715に達しました。

長らく、酒類製造は人気のビジネスとは言えなかったと思いますし、お酒の総需要は今後も減少が続くのは皆さんが自覚しているはずなのに、酒類製造に人気がでるとは！

長く業界に身を置くものとしては、酒類産業の「パラダイムシフト」であると感じます。大手企業に集約される過程が終わって、クラフト的なお酒、今までにないお酒が一定のシェアを持つ時代に入ったのだと思います。

●新規免許取得者が増える6つの品種

清酒製造場は、1956年の4,073から、2021年の1,544まで、単調減少を続けています。(原則として清酒の新規製造免許は出ないので減らざるを得ない) 酒類製造場の最大数を占める清酒製造場の数は減り続けているのに、酒類製造場の数が増えるということは、清酒以外の酒類生産者が増加しているということです。

具体的には「ウイスキー」「スピリッツ」「果実酒」「リキュール」「ビール」「発泡酒」の6つの品種が製造場の総数増加をけん引しています。これら6種について、2014年から2022年までの新規製造免許取得者の数をグラフ化してみました(青の棒グラフ)。2015年頃からの増加傾向がわかるほか、なぜか「コロナ後にかえて多くなっている」こともわかります。

なお、黄色の棒グラフは「試験免許」の取得者の数で、これも近年、相当数の取得があります。大学や高専、県の工業技術センター、大手企業の研究所などが、ビール、ウイスキー、果実酒などの試験免許を取得しているもので、これらは、「将来の新規参入者」につながるといいます。(グラフにはありませんが、実は「清酒」の試験免許の取得も活発です。)

●「コロナで免許取得者が増えた」？

6つの酒類の生産者数はコロナ後に増加傾向が強まっていることを、数字で確認してみます。コロナ前3年(2017-2019年)と、コロナ後3年(2020-2022年)の製造免許の取得者数を比べてみると、最も増加傾向が大きなウイスキーでは3.2倍、最も低い果実酒でも1.3倍となっています。

コロナ後は、1年平均でビール14.0 + 発泡酒88.3 = 102.3。発泡酒の多くはクラフトビールなので、年間約100軒(!)ものクラフトビール参入者がある状態になっています。

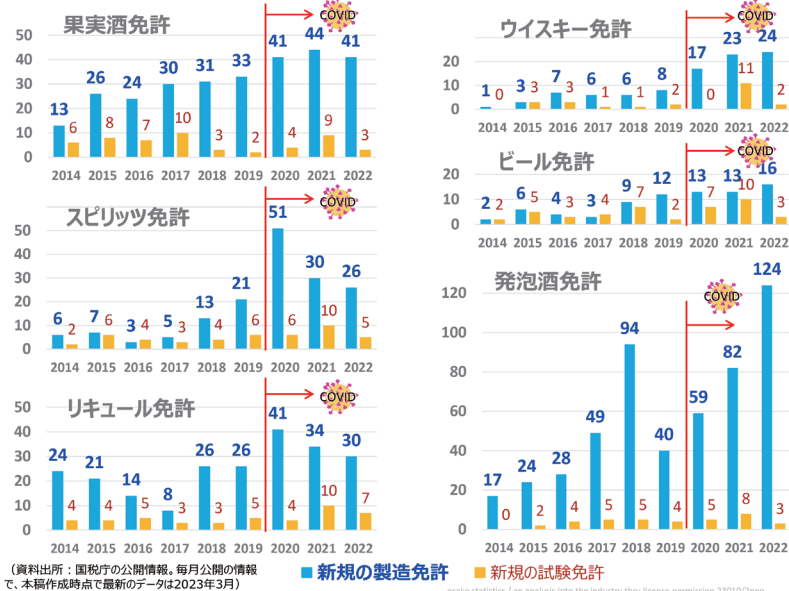
この背景には、21世紀にはいつ以降徐々に高まっていた6つの酒類への関心がもたらした参入や、様々な準備をへた開業時期が、偶々コロナ後に重なったこともあるのですが、「コロナパンデミック自体とも一定の関係がある」ように思えてなりません。コロナ後の活発な補助金行政やクラウドファンディングだけでなく、コロナ下の人間の心理的な面もあるように思います。

コロナパンデミックは、酒類産業に多大なネガティブな影響をもたらしましたが、一方で、酒類産業の変革を促した(ポジティブな影響もあった!)、の如しです。(text = t.kita)

本稿は、きた産業メルマガ vol.300、301、302 で書いたテーマの一部をビジュアル化したものです。メルマガクロニクルでその他の内容も合わせてご覧ください。



「増加6品種」の酒造免許の取得状況 2014→2022 8年間の推移



「増加6品種」のコロナ前後の免許取得状況の変化

	コロナ前の3年 (2017-2019年)		コロナ後の3年 (2020-2022年)		コロナ前後の 増加率
	3年間の 製造免許取得者の総数	1年平均 (a)	3年間の 製造免許取得者の総数	1年平均 (b)	
ウイスキー	20	6.7	64	21.3	3.2倍
スピリッツ	49	16.3	107	35.7	2.2倍
ビール	24	7.0	42	14.0	2.0倍
リキュール	60	20.0	105	35.0	1.8倍
発泡酒	183	61.0	265	88.3	1.4倍
果実酒	94	31.3	126	42.0	1.3倍